残したい想いと風景

朝日地域

西洞獅子

Nishiborajishi

語り手　高原真作
聞き手　山本真紀
企画　高山市
取材日：令和5年11月28日

高原 真作
昭和27年12月28日生

プロフィール

岐阜県立斐太高等学校卒業
岐阜県神社庁朝日部会事務局長
氷点下の森守る会事務局長

西洞獅子の舞い

津島神社の西洞獅子は、昭和62年10月に旧朝日村の無形民俗文化財に指定されています。西洞獅子には、雄と雌があります。そして、西洞獅子は他の地区の獅子舞みたいに左右に頭を振る「振り獅子」ではなく、獅子頭を回す舞い方をします。全国的にみても獅子頭を回す舞い方をしてるところは、あまりないんじゃないかなと思います。大先輩方にいろいろと聞いてみたのですが、結局、西洞獅子がいつ始まったのか、どこから来たのかの由来はわかりませんでした。

舞い方は「オーヒリホ」「コスズミ」「シタカイドウ」「担(つ)ぎ獅子」「しらみとり」「へんべとり」「オカラザケ」の７通り。残念ながら「オカラザケ」は、大先輩方から伝承できなかった。だから、今は「オカラザケ」を除いた６通りの舞い方を伝承していますよ。

「オーヒリホ」「コスズミ」「シタカイドウ」は、２頭から５頭の獅子を揃えて舞います。「担(つ)ぎ獅子」は、肩車をしたり担いだりする、まるで曲芸みたいな舞い方で、飛騨市古川町の数河獅子のようにアクロバット的な舞いです。

「へんべとり」は、ストーリーがあります。はじめは、雄と雌と仲良く遊んでいるのですが、へんべ（蛇）を見つけたとたん、あちらこちらで喧嘩をし始める。雄がへんべ（蛇）を奪い取り、自分の物だと油断している隙に雌が来て、へんべ（蛇）をぱくっと横取りしてしまいます。しかし、最後には雄と雌が仲良く一緒にへんべ（蛇）をくわえて終わります。

「しらみとり」は、２頭で自分の前足や後足や相手方の肩や背中の虱(しらみ)の取り合いをする舞い方です。

後継者の育成

昔は、子どもや若者もたくさんいたので、地元に帰った若者は、まずは登竜門みたいに獅子舞をしました。そうやって獅子舞を数年経験してから、鉦、雅楽などに行く人、そのまま獅子舞を続ける人に分かれていきました。獅子舞をしていた人は、当時、７、８人くらいいたかな。

自分が西洞獅子に関わり始めたのは、小学校の高学年の頃だったかな。冬の間、獅子舞担当の方が公民館に子ども達を集めて獅子舞を教えてくれたんです。その後、高山の高校を卒業して、地元に帰ってきてからは、ずっと西洞獅子に関わっています。若い頃は、獅子舞をしていましたが、40歳を過ぎるとだんだん体力的に無理になって、今は、獅子舞の太鼓を担当しています。

以前、40 歳を迎えたメンバー５、6人で夏休みに小中学生、高校生を集めて獅子舞の練習をしました。おやつを用意したり、ご褒美にバーベキューパーティーなどもやったりしました。その時の練習に参加していた子ども達が、今、30 歳前後になり、良い後継者になっています。彼らが、結婚して、子どもが生まれ、地元を離れて高山市街地に住むようになっても、祭りになると、高山から来てくれます。本当に獅子舞が大好きで、西洞獅子を守ってくれています。

アクロバットな舞い

朝日地域

西洞獅子
Nishiborajishi

招かれての出演

西洞獅子は、平成８年の鈴蘭国体に伴う道路改良での橋梁の竣工式や、高山博覧会（飛騨・高山 食と緑の博覧会（昭和63年））、国府ＪＡまつり、氷点下の森氷まつりなどに出演しました。高山市になってからも、高山市姉妹都市平塚の七夕まつり、美濃加茂の日本昭和村（「ぎふ清流里山公園」に改称）などで獅子舞を披露しました。たくさん出演した中でも、一番思い出に残っているのは、平成５年に行われた第61回の伊勢神宮の式年遷宮祭で獅子舞を披露したことです。その時は、同じ朝日の青屋獅子、高根の日和田獅子と一緒に外宮と内宮で獅子を舞いました。

へんべとり

西洞獅子の継承とこれから

これからも過疎化が進んで、継承していくことが困難になることがとても心配です。子どもがおらんと、ますます伝承が大変になってくるんじゃないかな。今は、稚児がちゃんと揃わない。それにこのような伝承は「お前達やれ」って強制するものじゃないからね。昔みたいに「獅子やで男」じゃなく、男女関係なく伝承していってもいいのかなとも思います。これは、西洞獅子だけの話じゃなく、全国各地もそういう現状なのでしょうがとても残念です。

これからも70歳をこえたメンバーと継承してくれている若いメンバーとともに、いつまでも可能な限り西洞獅子を継承していきたいと思います。

祭りに参加する高原さんと子ども達

©2023高山市デジタルアーカイブ